日本語アカデミックライティングにおける引用意識

—初年次学部留学生へのインタビューを通して—

坂口昌子・胡浩婧（京都外国語大学・京都外国語大学大学院生）
m_sakagu@kufs.ac.jp

【要約】

本研究は、引用について学びはじめたばかりの学部初年次生の協力者に対して、引用を用いて文章を書くことについての意識を質的に調査したものである。

先行研究からの引用意識に加え、本論では次の３つの可能性を示す。１）初年次の学生たちは「材料集め」として先行研究を引用している可能性、２）すぐに問題なく引用できるわけではない、だんだん上手になるので、卒論まで猶予が欲しいと考えている可能性、３）間接引用も使って文章を書きたいという前向きな意識を持っている可能性である。

１．はじめに

初年次学生を対象として、日本語母語話者と外国語母語話者の共修科目としてのアカデミックライティングの授業をしている中で、引用の誤用はもちろん、論理構造もない切り貼りの剽窃レポートを目にすることも多い。

さまざまなライティングの教科書が出版されており、授業でも引用についてかなりの時間を割いているのにもかかわらず、なぜ、初年次学生は適切に引用して文章を書くことができないのだろうか。本論では、その問題を協力者へのインタビューから探りたいと考えている。

学習者の文章から引用の困難点などを分析した論文は今まで多く書かれている（矢野 2014、中村他 2016、山本 2016、楊 2017、大津・八木 2017 など）が、それは教師の立場からの分析であることが多い。多様な学習者の文章作成への思いを分析していくには、質的な研究法も用いて、学習者の立場からの分析も深めていく必要があるのではないだろうか。しかし、学習者の意識について分析されたものは、楊（2018）、劉・村岡（2019）、劉（2023）があるだけで、今後さらに調査を進める必要があると考えている。これら３つの論考は、JFL 環境で学ぶ卒業論文を書くレベルの中国語母語話者を対象としているが、本論では、先行研究で挙げられている学習者とは異なる JSL 環境にいて、また引用を学び始めて時間が経っていない学習者を対象とした。引用を知ったばかりの学習者なので、引用に対しての新鮮な意識を聞き取ることができるのではないか

と考えている。

ただし、本論は、引用や文章を書くことについての学習者の意識を幅広く集めるという目的に立っており、結果を一般化しようとするものではない。

２．先行研究

学生の引用の誤用を扱った論文は多く見られるが、これらは、学習者の成果物から問題点を抽出したものである。一方、学生の引用意識に注目したものは管見の限りではあるが、まだ数が少ない。その中で、楊（2018）、劉・村岡（2019）、劉（2023）について見ていこう。

楊(2018)は中国の大学におけるアカデミックライティング教育について述べたものであるが、学生による「コピペ」についての言及がある。2 人の学習者（Li と R）のうち、Li は大学生の卒論の価値が期待されているものではないため、卒論を書くことに積極性を持てないことを挙げているし、R は身についたものが少ないので、コピペをするという発言をしている。

（１）学習者 LI：大体、みんなはわれわれに期待があまりないので、みんなの積極性があまりない。だから、コピーはいいと思います[1)]。（楊 2018：206）

（２）学習者 R：この 3 年間、日本語をずっと勉強しましたが、やっぱり身に付けたものが少ないと思います。だから、いつも他の人のことをコピーしたりしています。（楊 2018：206）

劉・村岡（2019）は JFL 環境での中国人日本語学習者（大学 3・4 年生　30 名　3 年生はＮ２に合格、4 年生はＮ１に合格）に引用に関する意識をアンケート調査したものであり、分析はテキストマイニングで行われている。結果としては、学習者は先行研究についての十分な認識ができているとは言えないと結論付けている。具体的には、先行研究が不可欠であることを十分認識していないことと、先行研究から知識を吸収するという「学習者としての立場」を取っているために批判的に先行研究を読む力が弱いということが指摘されている。また、引用に関して自己評価は低く、直接引用より間接引用に困難を感じているという。

また、劉（2023）では、中国国内の日本語学習者にインタビューをし、どんなところで引用を使うかといえば、「自分の論点を補強する、自分の論点の具体例を提示する、別の視点を提示する、社会的・理論的背景を説明する、概念の定義を提示する、より学術的に見せる」　という６つの項目にまとめることができたとしている。これは、情報源、根拠としての先行研究利用と考えられ、劉・村岡（2019）と同様、「批判的立場に立って先行研究を読む力」に欠けていると考えられる。

さらに、不適切な引用が起きる原因として、「学術的に見せるため」という認識を持つ学習者がいたこと、「常識」や「既有知識」であると考えて引用をしなかったこと、パラフレーズの困難などのために原典を抽出するだけの引用を行ったことを挙げている。

以上の３つの先行研究から分かることは、学習者は引用について次の意識を持っているのではないかということである。

１．先行研究は知識を得るためや、自分の論点を補強するために引用されている可能性が強

く、批判的に読むことができていない。アカデミックなレポートの体裁を整えるために形式的に読んでいるので、情報を取捨選択することがあまりできていない。

２．引用についての自己評価が低く、引用への到達度の低さを肯定している傾向がある。

３．間接引用はパラフレーズの困難、取捨選択の困難などの理由のために、直接引用よりもさらに難しいと感じており、直接引用を多用する。

本論での調査の目的は、これらの結果に加えて、どのような引用意識や引用に関わる誤解があり得るのかということを探ることである。

３．調査方法

2022 年７月に、中国語を母語とする協力者６名に中国語による半構造化インタビューを実施した。彼らは４月からアカデミックライティングの授業を履修している。

インタビューした音声データを文字化し、中国語を日本語に翻訳した。この部分は胡が担当した。アカデミックライティングの授業担当者は坂口だったが、授業担当者ではなく、先輩が母語でインタビューをしたことで、協力者は授業担当者に話すよりももっと本音を話したと考えられる。

その後、日本語訳されたインタビューデータを SCAT を用いてコーディングし、構成概念を抽出し、ストーリーラインを作成した。この部分を担当したのは坂口である。

３．１ 調査協力者

調査に協力したのは、中国語を母語とする６人の学習者で、2022 年春学期に初年次学生用のアカデミックライティングに関わる授業を受講しており、個人名を出さないことを条件にインタビュー内容とレポートの文章を研究用に使用することを許諾した者である。

JLPT の N1～N2 合格者で、調査者らの所属する大学の学部１年次生である。

３．２ インタビュー項目

インタビューし、本論で扱うのは、次の７つの点についてである。

1. 協力者の特性に関わる質問

①日本語の学習歴・学んだ場所や機関

②「引用」のしかたをいつ・誰から学んだか

③文章を書くことへの取り組み方はどうか

2. 引用に関わる質問

④引用を使うことの意味は何か

⑤直接引用と間接引用についての意識と知識

⑥中国の作文の習慣である「名言の使用」・一般常識について

⑦引用についての自己評価

４．インタビューの分析結果

４．１ 調査協力者の特性について

インタビューした項目の①から③は、調査協力者の特性がわかるものとなっている。本研究は、調査協力者の特性によってどのような傾向があるのかということを分析するわけではないが、これらの学校教育歴、引用を知った時期、レポート課題への取り組み方という３つの特性についてまとめて表１に示した。

学校教育歴に関しては、さまざまである。協力者１が最も長く日本での学校教育を受けている。他にも高校から日本で学校教育を受けた経験があるのが協力者５であるが、高校 3 年生の１年間だけである。また、協力者４は日本以外の国ですでに大学を卒業しており、協力者２も日本以外の国で短期大学を卒業している。他の協力者は大学から日本で学んでいるが、日本語学校を経ている者もいる。

表１　調査協力者について

番号	学校教育歴	引用を知った時期	課題への取り組み方
1	小 5 で渡日後、日本で中・高校を卒業、日本の大学へ入学	大学入学後	複数回の推敲も行うほど丁寧に取り組む
2	中国の短期大学を卒業後、中国の塾で 6 ヶ月間。日本語学校 1 年を経て、日本の大学へ入学	大学入学後	教師や重要度などによって取り組み方は異なる
3	中国の高校を卒業後、中国の塾で 4 ヶ月間。日本語学校 1 年間を経て日本の大学へ入学	大学入学後	教師や重要度、準備時間などによって取り組み方は異なる
4	他国の大学卒業後、日本の大学へ入学	他国の大学入学後	複数回の推敲も行うほど丁寧に取り組む
5	高校 3 年生から渡日、日本の大学へ入学	日本の高校在校中	教師や重要度、準備時間などによって取り組み方は異なる
6	中国の高校を卒業後、日本の大学へ入学	大学入学後	教師や重要度、準備時間などによって取り組み方は異なる

いつ引用について学んだかという問いには、「大学に入学後」と答えた者が最も多く、協力者

４のように他国で大学教育を受けた者はその時の大学在学中に学んだと回答した。また、協力者５は高校３年生から日本で教育を受けたが、そのときに引用を知ったと述べている。しかし、そもそもの引用を知るきっかけは小学校の時に盗用のニュースを見て、参考と盗用は何が違うのかと疑問に思ったことを語っている。

（３）日本の高校で、引用のことを知りましたが、引用の仕方は自分で調べたり、いとこにも聞きました。小学校の頃、誰かが盗用したというニュースをよく新聞で読ました。盗用と参考の区別が気になりました。（我在那里知道了引用的东西，但还是自己去查的，听我堂哥说的。小学吧就我经常在电视里看到谁有抄袭了啥的，然后我就很好奇抄袭和借鉴的区别。）

もう１人、高校時代を日本で過ごした協力者１がいるが、協力者１は次のように述べ、大学入学以前は引用の必要性を知らなかったこと、教育時期は早いほうがよいことにも言及している。

（４）少なくとも高校時代は書いてなくて、せいぜい感想文くらいでした。もっと早く引用を教えた方がいいと思います、例えば高校からです。これは結構重要なことです。（起码我的高中不写，最多就是感想。我觉得应该在更早以前比如高中的时候就告诉这些知识，要不然写文章的时候可能会用到别人的话，如果引用不正确就会被当成剽窃，所以应该在更早的时候就进行这样的教育。）

レポート課題を書くことにどう取り組んでいるかということに関しては、推敲を何度も重ねるほど熱心に取り組んでいると答えた者が２名いた。

（５）いいえ。真面目にやります。全ての授業の宿題です。800 字のレポートは 2 時間かかりました。（我会很认真，所有的。八百字的东西我得写两个小时。）

逆に、先生の厳しさや、課題の重要度などに合わせて自分の取り組み方も変えると答えた者が４名だった。

（６）厳しい授業や厳しい先生の場合は、真面目にやります。（严格的课或者老师的话，我还是会认真的。）

（７）配点次第です。そして、日本人クラスメイトがいるから、頑張らないといけないと思います。（还是看给的多少吧，而且班里还有日本人，肯定要努力呀。）

４．２ 引用に関わる質問

ここでは、④引用を使うことの意味、⑤直接引用と間接引用についての意識と知識、⑥一般常識や中国の作文習慣である「名言の使用」について、⑦引用についての自己評価の４点について考察する。

４．２．１ 引用を使うことの意味

１つ目は、引用を使うことの意味について観察する。表２に構成要素を列挙した。「盗用はいけない」「引用は重要だ」ということだけを述べている協力者もいたが、いくつかの興味深い構成要素を取り出すことができた。６人全員が「盗用はいけない」という認識を持っていることはわかったが、それでもなお、【大量のレポートをこなすための文字数かせぎ】という構成要素が

見られたのは、注意する必要があるだろう。

表２　引用を使うことの意味

【日本では盗用は犯罪】【盗用を防ぐための引用】
【知的財産権】【研究の成果者の区別】【原著者の権利の保護】
【文章の信頼度担保】
【大量のレポートをこなすための文字数かせぎ】

正しい知識としては、【知的財産権】【研究の成果者の区別】【原著者の権利の保護】【文章の信頼度担保】などが挙げられるだろうが、ここには劉・村岡（2019）が言う「批判的な立場に立って読む」という姿勢は表れていない。劉（2023）でも、引用が必要な理由として、「自分の論点を補強する」が最も多く、次いで「自分の論点の具体例を提示する」が多かったことを挙げている。批判的に先行研究を読むということは、卒論を書くレベルの学習者にも難しかったことがうかがえる。学習段階として、初年次の学生に望む引用への姿勢とはどのようなものなのか、今後各大学の指針などを調査してみたいと考えている。

一方で、【大量のレポートをこなすための文字数かせぎの引用】をしているという協力者や、自分独自の内容のための引用をすべきだが、自分自身の学術能力の欠如のために観点自体をネットから借用しているのが現状であると述べる協力者もいた。

（８）今は引用をうまく使えないです。今多くの観点はネット上のものを写しています。でも本番で論文を書く時は、引用は重要で、自分の独自の内容がもっと必要だと思います。（我现在很多引用引的不太好，很多观点大部分是在网上看的抄的，我觉得真正的论文是要引用，但大部分还是要自己的内容。）

４．２．２ 直接引用と間接引用についての意識と知識

次に、⑤の「直接引用と間接引用についての意識と知識」に関するものについては、先行研究で述べられるように、間接引用については不安を持つ協力者が多い。

表３　直接引用と間接引用に関する意識

【直接引用への自信】
【以前の引用知識との相違】
【間接引用へのあいまいな知識の自覚】【不正確な間接引用への不安】
【原著者の主張を正確に引用できるかどうかの不安】
【ワンパターンになりがちな直接引用】【まとまりに欠ける直接引用】
【「査重率」を下げるための間接引用】
【直接引用よりも自分の解釈が含められる間接引用】
【直接引用を避けるための盗用】

その結果として、６人中４人は【通常使用は慣れた直接引用】をする。

（９）（「直接引用は幼稚だと思うか」と質問され）それはないですね。でも、直接引用は「そのまま」です。私が使うのは直接引用です。簡単ですから。今の日本語レベルはそんなに高くないからです。（不会，但直接引用看起来会有点生硬。我用直接更多，比较省事，而且我的日语还没有达到用间接可以不出错的水平。）

ただし、間接引用をすると答えた協力者が２人いた。協力者６は、【高校時代の恩師のアドバイス】に従って、【ワンパターンな文章になる直接引用】を避けるためと、【査重率を下げるための間接引用】を通常用いている。

また、同様に協力者４も間接引用を用いている。協力者４は、【まとまりに欠ける直接引用】という印象を持っている。以前の大学教育で得た【英語の文章作法にはない直接引用】を避けるため[2)]と【査重率（ネット上の引用一致率）を下げるための間接引用】を通常用いると言う。

（10）（「直接引用は幼稚だと思うか」と質問され）ちょっとですね。やはりワンパターンの作文を書かない方がいいです。間接引用をよく使います。査重がヤバいですからね。（有点吧，还有就是会很单调啊。间接吧，毕竟有查重率。）

「査重率」という言葉がこの２名のインタビューに表れるが、引用率のことで、剽窃ソフトなどにかけたときに、全体の文章の何割かがネット上の文章と一致する率を指している。ある程度の率を超えると不合格になることがあるようだ。

（11）はい。前の私の大学は、査重率は 20 パーセントを超えることはできませんでした。（嗯，我之前那个大学嘛，就查重率，不能超过 20%。）

また、【直接引用よりも自分の解釈が入れられる間接引用】を使えば、より学術的、論文的になると考えている協力者がいた。

（12）でも直接引用も重要ですが、間接引用より少なめに書くのがいいと思います。論文ですから、自分の考えの方を多く書いたほうがいいと思います。（但直接引用也很重要啊，不过比起间接的话，还是少用吧。毕竟还是论文啊，自己的想发多一点比较好。）

一方で、間接引用を使うことは難しく、直接引用ばかりになるので、出典を隠す書き方をすると答えた協力者もいる。これは教える側からするともっとも困惑する例だが、十分悪いことはわかっていてコピペをする心境が伝わってくる。

（13）3 箇所か 4 箇所以上引用すると、多すぎると思いました。だから、コピペしました。（我还以为引用超过三四个就是太多。所以我才复制粘贴的。）

更に、直接引用は原文をそのまま括弧に入れて引用することは皆が知っていたが、一部の単語を変えれば引用扱いをしなくてもいいという誤解や、間接引用とは「自分の意見を入れること」だと誤解していた協力者もいた。また、段落全部を出典を明記せずに書くことは盗用だが、一文ならよいと思う誤解などもあり、間接引用が誤用や不正な引用を招く原因の 1 つになっていることは間違いがなさそうである。

４．２．３ 中国の作文習慣である「名言の使用」・一般常識について

中国の作文習慣のひとつに著名人などの「名言」を使用するということがある。そのときは一般的に文献を引用せず、自分の記憶を頼りに書くことが多いため、これも引用の誤用を誘発する原因ではないかと考えて、インタビュー項目に含めた。しかし、今回の協力者の中で日本の大学でのレポートに名言の使用をする協力者はいなかった。

日本で学校教育を受けた協力者１だけが、「名言を使用する習慣については知らない」と答えたが、他の５名はすべてその習慣について知っており、小学生のときや以前の学校で使った経験もある。しかし、現在は使用しないというのは、日本や日本人に関わる名言を知らないためや、名言の使用を以前恩師に止められた経験からだという。

(14) 大学の時論文の最後に名言を置いていましたが、大学の先生によくないと言われました。ちょっと見ただけでこれは文字数を増やすためのわざだとわかります。(我大学就这么做的，就在我论文后面放一段名言，但我大学老师说这样不太好。就一看就知道是为了凑字数呀。)

ただ、現在は使用していないが、日本の名言を知った場合は使いたいと考えている者もいる。

(15) はい、昔はそうしましたが、日本ではそうしません。日本の名言を知らないからです。もし分かったら、文字数を増やすため、やります。(啊会，小时候会，在日本不会，因为日本的我不知道，如果知道我也会写，为了凑字数。)

また、名言のことから波及して、「一般常識」に話題が及んだので、その部分についてもインタビューした。次の表４が「一般常識の定義」だが、ここだけを見ると問題はなさそうである。

表４　一般常識の定義

【中学まで勉強した知識が一般常識】
【高校で学んだ知識が一般常識】
【小さい頃学んだものが一般常識】
【日常的なことは一般常識】
【知らない人がいない知識が一般常識】

しかし、それを引用するかどうかというところでは理解に違いがあるようだ。表５に示したが、【記憶した知識は引用不要】や、【一般常識は引用不要】というように考えている協力者もいる。それだけなら問題はないが、(16) から (18)のような意識の違いは同じ授業を受けていてもあるようで、(16) (17) の「小さい頃から学んだものは全部他人の知識」「ちょっと変えたら大丈夫」というような意識は不適切な引用に結びつく可能性もある。

表５　一般常識の引用についての意識

【記憶した知識は引用不要】
【一般常識は引用不要】

【他者自分を混合して生まれる新しい考え方】 【記憶していても引用要】

(16) 覚えているなら自分のものになりますね。小さい頃から学んだものは全部他人の知識です。他人の知識と自分の知識を混合して、新しいものを生み出して来ました。(我记得就是我的了。从小到大学的东西都是别人灌输给你的，再混合自己的想法，才会产生新的东西。)

(17) 覚えていますけど、やはり自分のものではありません。でも、もしちょっと変えたら、大丈夫だと思います。虽然记得别热的话，但是不管什么时候把别人的话写下来都是别人的，按照人家原文写的都是人家的，但如果其中做了一些变动，只用了一句中的几个单词，我觉得应该是没问题。

(18)（自分がおぼえていることは引用しなくてもよいのではないかと問われ）これは他人の話ですから、引用が必要です。(这个是别人的吧，还得引用吧。)

４．２．４ 引用についての自己評価

協力者たちは、【以前の引用知識との相違】【授業形式の相違】【引用の多数の種類】などから、【引用への不明瞭感】を持っている。そのためもあって、まだ【書く時はひながたを参照する必要性】があり、【実力不足】や【引用の初心者】であるという認識を持っている。そして、今はできないが、【自分が成長すれば、慎重に引用を使用できるようになるという希望】を持っている。誤解も多く、被引用情報が権威がないものだったり、量が少なかったり、質が低いときは盗用にならないと思っている可能性も明らかになった。

表６　引用についての自己評価

【書く時はひながたを参照する必要性】 【実力不足】【引用の初心者】 【自分が成長すれば、慎重に引用を使用するという思い】【正しく使えるための時間的猶予】 【卒論を書く時の成長した自分】 【引用への不明瞭感】←【以前の引用知識との相違】【授業形式の相違】【引用の多数の種類】 【権威のあるものからの盗用は重罪だが、権威のないものからの盗用は軽犯罪】 【量によって変わる盗用意識】 【引用内容によって変わる盗用意識】 【記憶後、一部変更した他者の意見は引用不要】

５．まとめと今後の課題

以上、見てきたことをまとめると、初年次の協力者たちは、引用に対して次のような意識を持っていると言えそうである。

1. 原著者の権利を守るためや、研究成果の成果者を区別するため、また文章の信頼度を保つために引用を使うという認識をもっていて、あくまでも「レポート書くための材料集め」の方法が引用だと考えている可能性が示唆された。そのため、引用がないと、レポートの文字数を埋めるのが大変だと感じている学習者もいる。批判的に読むことはできていない。
2. 自己評価としては高くはないが、直接引用を使って述べるなどのストラテジーを使ってある程度使いこなせているという感覚を持つ者もいる。これから学習経験を積み、卒論を書く頃にはうまく使いこなせるようになる、今はまだ完全でなくてもよいと考えている。
3. 実際に間接引用を使いこなせているわけではないが、直接引用を多用することへの躊躇もある。間接引用も使えるようになりたいが、自信がない。懸念は「引用の数」が意識されていたことである。引用の数を減らすために出典を隠してコピペをするという発言もあったし、仮に引用率という数値を規定してしまうことは、数値的によいレポートだという誤った認識をもってしまう可能性があるのではないだろうか。

現在は、学術的な文章を書きはじめたばかりの協力者に対して、半年間レポートの基礎を学んだあとで引用についてどのような意識を持っているのかという調査をしたが、「なぜ引用ができないのか」という理由の一端が明らかになっただけである。これを利用して次年度の文章教育に反映し、学習段階に応じたルーブリックなどを作成したいと考えている。

また、今後、レポートへの取り組み方や、日本語力、文章を書くことに対する中等教育までの教育観などのさまざまな要因によってどう異なってくるのかということを明らかにしていき、一般化できる結果を得る必要もあるのではないかと考えている。また、インタビュー結果を何度も読み直していると、ところどころに引用への誤解と思われる協力者の発言が見られた。どのような思い込みや勘違いをするのか、そのような誤解を招かないためにどのような指導法をとるのがよいのかなどについても考察していかなければならないと考える。さらに、人工知能や機械翻訳などの利用可能なリソースを使って適切に文章を書いていく指導をするためにはどのような点に注意しないといけないのかということにも応用できるように、研究の方向性を定めていきたいと考えている。

注

1）言いよどみや言い直しの部分などは筆者が一部改めている。
2）「英語には直接引用はない」というのは、研究協力者の思い込みだと思われる。

謝辞

インタビュー調査にご協力くださった協力者の皆様に心からお礼を申し上げます。ありがとうございました。

参考文献

大島弥生（2017）「引用を学ぶ基礎の段階の大学生の文章に見られる諸問題」『専門日本語教育学会研

究討論会誌』19　pp.24-25
大谷尚（2021）『質的研究の考え方　研究方法論からSCATによる分析まで』名古屋大学出版会
大津友美・八木真生（2017）「アカデミックな言語活動における引用に関する問題―日本語学習者の口頭発表データから指導方法を考える―」『東京外国語大学　留学生日本語教育センター論集』43 pp.1-17
中村かおり・近藤祐子・向井留実子（2016）「アカデミックライティングにおける不適切な引用文の分類と課題」『2016年日本語教育国際研究大会予稿集』pp.8-9
矢野和歌子（2014）「学部留学生の論説文における引用の課題」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』6　pp94-101
山本富美子・二通信子（2015）「論文の引用・解釈構造-人文・社会科学系論文指導のための基礎的研究-」『日本語教育』160　pp.94-108
山本富美子（2016）「論文の『意図的ではない剽窃』の問題」『Global Communication』6 pp.117-132
楊秀娥（2017）「日本語学習者の引用使用の実態調査」『専門日本語教育研究』19　pp.57-62
楊秀娥（2018）『日本語教育学の新潮流23　日本語表現力と批判的思考力を育むアカデミック・ライティング教育　中国の大学の日本語専攻における対話を活かした卒業論文支援を例に』ココ出版
劉 偉 ・村岡 貴子（2019）「学術的文章の引用に関する意識調査―中国人上級日本語学習者の事例分析―」『多文化社会と留学生交流　大阪大学国際教育交流センター研究論集』23　pp.77-89
劉東（2023）「日本語学習者のアカデミックライティングにおける引用の使用上の課題－中国人学習者の事例分析から－」『専門日本語教育研究』25，pp.3-10